

はじめに

「大學之道在明明徳在親民在止於至善」は白川金文によれば以下の通りとなる。

大學之道在明明徳在親民在止於至善

所謂漢字が流通する以前に用いられていたものであり、かような文字のもつ意味は、変わらぬものもありますが漢字のものとは違うものがあります。用いられる社会が異なり、詞は時代により付される意味が変化をするからです。

大には dà (大小の大)、dài (大王の大)、tài (太や泰) の別があります。學 xué との組み合わせですが、まず學は、千木のある特別な建物と子の組み合わせ、莊嚴さがある場と子供の組み合わせであり、子弟を厳しく教育する、あるいは子弟が学習する様とされます。

dà (大小の大) 學となれば、小との対比となります。八歳になると、灑掃 (拭き掃除)・応対・進退の節を中心に、礼・楽・射 (弓)・御 (馬車)・書 (文字)・数 (計算) をも教えたとされ、いわゆる郷党における學であり、これを小學とみます。

一方、理を窮め、心を正しふし、己を脩め、人を治める道、国を治める、いわゆる王たる \*1 篆書道を教育、修養することを大 dài (おほひ) なる學とします、つまり国學となります。

泰 \*1 は大と収と水からなり、大は人の正面形、収は左右の手、人が水中に陥り、これを両手で助ける意の字で、救う、安泰を表し、tài xué となれば、人を救い安泰にする學となります。



礼記の大学が編纂された漢代に付された意味と孔子の時代とでは學のもつ意味は異なっているでしょうし、朱子の時代ともなれば、更に異なって参ります。彼は、明を圧迫する金に対する政権幹部の宥和策を批判し、飢饉に際して幹部の汚職に苦言を呈し、稲種の貸し付けを行い (後の社会) 民の救済に尽力をしております。また、詩・書・礼・楽・春秋・論語・孟子を丸暗記する科举試験学習の在り方に反発し、仏教、わけでも禅宗に傾倒したのですが、後に、儒学を順序立てて学べるよう、礼記の大學を諸学の始とすべく改訂に研鑽を重ねられ、所謂学校を重視し、廃れた塾を復興し、弟子を養成したようです。

さて、ここでは、朱子に先立つ「明徳」「親民」「止於至善」の古い読み方をみることにします。

明徳について 明 徳

徳といえば、常識的には仁義礼智信、その心は生まれながらにして与えられ、誰の心にも内在しており、それを素直に実生活に生かすことが求められます。しかし、出来るかといえば難しいものです。まあ、なんとなく分かるように思いますが、あなたにとって、仁とは？義とは？礼とは？智とは？信とは？と突っ込まれますと、対 (こた) えるに窮すことでしょう。

ただこれも時代によって捉え方が異なります。後漢の許慎の「説文解字」には、徳は「升（のぼる）也」とあり、「礼記、曲礼上」では「車に徳（のぼ）り、旌（はた）を結ぶ」とあり、これまた面食らいます。論語に「子の曰く、之を道（みちび）くに政を以てし、之を齊（ととのえ）るに刑を以てせば、民は免れ而して恥無し。之を道くに徳を以てし、之を齊るに禮を以てせば、恥有りて且つ格（いた）る」とある徳は、後漢では、過去のものでした。

戦国時代や秦や漢に到る天下統一を経た時代にあつては、勝ちを制すは徳ではなく、力であり、富で増強し、要地を手中に押さえることが肝心でした。徳は、天下を統一して後、秩序を構築して民を治めるに役立つものとされました。我国に徳が導入された時も何のことも分からなかったとみえ、その訓をみてみますと、天皇（すめらみこと）の徳とは“いきほひ（勢）”とあります。「仁」にしましても 天皇の賜ふ“うつくしび（恵）”としております。儒家の仁義礼智信がまともに導入されるのは、江戸幕府が儒者を採用して統治に資して以降のことでした。

「説文解字」の「升」は升殿の升、殿に升（のぼる）こと、つまり昇進すること、徳があれば取り立てられる、秩序ある社会を前提とした説明といえるでしょう。

三国時代の魏の張揖（ちょうゆう）によって編纂された辞典「広雅」では徳は「得也」とあります。これは、周易上経の「剥」の上九の「碩果不食、君子得輿、小人剥廬」の「得」です。「剥」は☶と☳の組み合わせ、陽一と陰十の卦であり、上九では、碩（大きく立派な）果実が一個食われずかろうじて残る切羽詰まった様、君子なら輿（民の支持）を得て復活する。かくなる場合、小人なら廬（質素な小屋）まで剥（はぎ取られて終わる）という意味のようです。君子ならば「得（徳）」があるというわけです。

三国時代に徳を重んじたとされる劉備は、「得」がなかったことになります。紆余曲折を乗り越え、宮殿に升して天下に号令をなした魏の曹操はまさに「得（徳）」の人であったわけです。

古く徳の字は、+と目からなり\*𠂔省の字の系統とされ、心や彳は後に付され、意味を限定したものです。省は「かえりみる」ことで、己の言と行、他人の言とその結果の行状をかえりみる、それによって自己の心、行為を正し、また人と人との関係をよりよきものにするに資するものでした。

しかし、孔子自ら、「已矣乎（おしまいだな）、吾、未だ能く其の過を見て内に自ら訟（せ）める者を見ざるなり」と嘆かれたごとく、下剋上の世では義より利が先に立ち、内省して義を立てるは、ジョン・レノンの「You may say I'm a dreamer. But I'm not the only one. I hope someday you will join us.」みたいなものでした。

\*𠂔

ところで、明徳の「明」は日と月ですから、見えないものを見えるようにしてくれるもの、天上天下、四海に及ぶものです。子貢は君子の過ちは日蝕のようなもので、誰にもみえると云いました。明徳は誰にもわけへだてなく及ぶもの、堯や舜のような聖人の徳とされました。これが明徳の理想でした。

明徳の反が玄德です。劉備の字（あざな）を玄德といいました。「玄」とは「明」の反対で黒い、暗い、奥深い、隠れた、ですから玄德は表にはみえないが心の裏、奥底にある徳を想定しています。しかし劉備の玄德は志を果たすことは出来ませんでした。

玄德の本領は老子にありました。「之を生じ之を畜（ふる）い、生ずるも有せず、爲すも恃（たの）まず。長ずるも宰（さい）せず。これを玄德と謂ふ（生み出し育成しても、それを自分の物とせず、為すも人をあてにせず、成ればそこを去る）」、何もしていない、勝手に事が完成するようにする。

自ずと然り、無為自然、天下を治める原理の一つですが、表立って天下に号令する者の徳ではありません。ただ、人形浄瑠璃社会では玄德を金子の隠語としますから、玄德にはなんでもあり、性の赴（おもむ）くところ

ろですから一筋縄ではまいりません。

## 親民について 𡗗 𡗗 (𡗗)

朱子学にあつては、親民では意味が通じないとして新民、民を新たにすると訓じ、旧（ふるき）を革（あらた）む、民衆を教化して革新する、旧弊を改め新しく教化する風にみられるようになりました。

令和の人には、その方が合理的に聞こえますが、温古知新でみてみましょう。

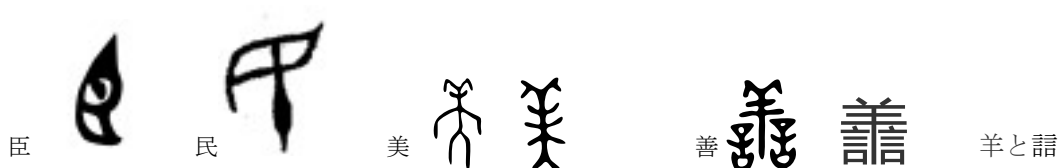
親は亲（辛と木が一字）と見からなります。亲とは辛（はり）を打った木のことで、これを斤（き）ることが新です。この木を切って位牌を作る、その位牌を子孫が見る、廟中における祖先の祭祀を表すものです。見られているのが親であり、その祭祀に列席する者が親族、そこから「みずから」の意味にも用いられるようになったとあります。

説文解字の頃には「至るなり」とあり、その地に至るごとく、情意の懇（ねむごろ）の到るを至、すなわち父母に至ることとし、親としています。

民といえば、令和の人は国民、人民、一般の人というイメージですが、甲骨文の字形では、民𡗗は一眼を刺すという形です。捕虜にした異族で眼を刺し仕えさせた者とされます。眼を見上げ、仕えることを意味する臣𡗗の字形を想起させます。瞽師、盲目の樂人にその名残がみられるとあります。

それから、同族以外で服する者を民としたようです。説文解字では、「眾（衆）萌なり。古文の象に従う」とあり、眾萌とは何処にでも茂る草のように居る衆となり、金文の時代には、氓（亡命の民、浮浪の行商人）、𡗗（耕作する民）と限定する字が用いられ、漢代では、同国民であっても士大夫以外、官・位のない耕作者、商人、職人等々を指しました。

親民という詞が大学に用いられているのは、臣従する民に至る、民に親しみ、明德（学）を民に至らしめる義が込められているのでしょう。



## 止於至善について 𡗗 𡗗 𡗗 𡗗

明德があり、親民たるには、至善に止まることができねばなりません。論語「里仁篇」、「子曰里仁爲美擇不處仁焉得知」とあります。里仁とは仁に里（を）るで、常に「仁」に処（を）ることを美𡗗𡗗とします。

美は羊と大からなります。𡗗（たつ）の字がありますが、大はこの場合羊の後脚であり、羊が生れる形で生れたばかりの子羊を意味します。ふっくらとした羊の肉はおいしいものです。風物や人の形、あるいは行いのよきものを美としました。

説文解字では美について、「甘なり、羊に従ひ大に従ふ。羊は六畜に在り、主として膳に給すなり。美と善は同意」とあり、注に、「甘部に曰く、美なり。五味の一、而して五味の美は皆（すべ）て甘と曰ふ。之を引伸して凡そ好（よ）きもの皆て之を美と謂ふ。羊大に従ふ。羊大は則ち肥美なり・・・羊は祥なり。故に美は羊に従ひ、此の説羊の意に従ふ」としています。

「擇（えら）んで仁に處（を）らずんば焉（いづく）んぞ知を得ん」、「仁」に處（を）らずば「知」を得ることはできないとするのが通説ですが、（仁者として）知られることを得られないともよめます。

君子たる者は「無終食之間違仁、造次必於是、顛沛必於是」、食事の際にも、突発的なことがあっても、ひっくり返るようなことがあっても「仁」に処れといえます。しかし、常に「仁」に処ることは実際生活においては極めて困難なことです。

雍也篇の「子曰回也其心三月不違仁其餘則日月至焉而已矣」、顔回は三ヶ月に亘って、その心が仁にとどまっている、しかし、その他の者（弟子達）は、一日、長くとも一月（孔子）にすぎない、とても顔回には及ばないとしています。

善は、説文解字では、「吉なり。言に従ひ羊に従ふ。此は義美と同意」とあります。説文では善を言言と羊の組み合わせとなり、意味がとれず、善は周礼に見えるのみで善のことでありと注しているにすぎません。

金文の字形では言ではなく辛と𠂔からなり、𠂔は神羊の前での審判における、双方の誓文を容れた容器とするようです。墨子にその記述があり、神社で双方が血をすすって誓い、それぞれが提供した羊の頸血を社に注ぎ、羊が異常を示した方が敗訴となるというもので、斉の神社でのケースでは、一方の羊が踊り狂って足を折って倒れ、その羊の提供者が敗訴となったそうです。敗訴者の𠂔は辛で開けて羊、提供者もろとも袋に入れられ川に流されたといえます。善は審判の用語であったのですが、神意にかなうこと、よきことを意味するようになったとあります。

至善とは神意に適うレベルの善。八佾篇に、「子謂韶、盡美矣、又盡善也。謂武、盡美矣、未盡善也（舜の音楽である韶は美も善も尽くしている、周の武王の音楽である武は美を尽くすが善は尽くしていない）」とあり、至善というのは、舜や堯を想定しているとみることができるでしょう。

このように大学之道をみますと、春秋時代末を生きた孔子のイメージ、下剋上の世に、その主張が採用されずどの諸侯からも敬遠され、落胆するも「仁に里ること」に奮闘する孔子の姿とは異なります。志を持ち続け苦難を歩む姿は横に置かれ、むしろ、天下国家を治める学であり、孔子を舜や堯という聖人に匹敵する聖人としています。つまり、漢帝国が成立し、博士が選ばれ、儒学が国学となり、太子や、家臣を教化する体制の中で、至善が求められ、それを天下万民に及ぼすことを理想としております。

それは、大学が、「古の明德を天下に明らかにせむと欲（す）は、先ず其の国を治む。其の国を治めんと欲は、先ず其の家を斉（ととの）う。其の家を斉えむと欲は、先ず其の身を修む。其の身を修めんと欲は、先ず其の心を正す。其の心を正さんと欲は、先ず其の意を誠にす。其の意を誠に欲は、先ず其の知を致（きわ）む。知を致むは、物に格（いた）るに在り。物に格りて後に知至（きわ）む。知至まりて後に意誠なり。意誠にして後心正し。心正しくして後身修む。身修りて後家斉う。家斉いて後国治まる。国治まりて後天下平らかなり」と続いていることから明らかでしょう。

朱子は、その学が科举試験のなかで実態と乖離していることに失望し、悟りを目指して禅へ傾倒したようです。しかし、禅が政治を刷新することも、学を民に及ぼすことも不可と一念発起、それを可能にするために「大学章句」の執筆となったように思われます。

## 朱熹の生涯

朱熹は南宋の建炎4年(1130)に、南劍州尤溪(ゆうけい)県(福建省)で朱松(字;喬年、号;韋齋)の三男として生まれております。「新安の朱熹」と自署しており、新安の人とされがちですが、新安は歙(きゅう)県(安徽省)の旧地名で、遠祖の地でありまして、新安から唐代に婺源(ぶげん;江西省)に移住し、朱松の時「金」の脅威を避け尤溪に居住したとあります。

韋齋(いさい)は国利民福の志を抱き、金軍に対しては主戦論を唱え、宰相の秦檜(しんかい)の講和論に反対し左遷され、その志を果たすことができませんでした。韋齋は羅豫章(らよしょう)の門下にあり、羅豫章は北宋の程子(明道と伊川)の高弟楊龜山(ようきざん)より程学を学んでおります。

朱熹はこの学の影響を受けておりましたが、禪宗にひかれ若くして開善道謙(かいぜんどうけん)の門を叩いております。19歳にして進士の試験に合格し、同安県主簿に赴任したのですが、科挙試験の為に学ぶ儒学に嫌気がさしていたようです。道謙の師の大慧宗杲(だいえそうこう)は秦檜の講和論に反対して配流された僧であり、朱熹は彼を「禪家の俠(きょう;おとこだて)」と敬意を表しておりました。

この地で朱熹は、韋齋と同門の友李延平(りえんぺい)と会います。大慧の躍動的な活禪にのめり込んでいた朱熹は、「黙座して心を澄し、喜怒哀楽がまだ発しない以前の気象をきわめる」とする延平との交流から、禪に疑問を懐くようになったようです。「悟りと心の充足」に満足するのは不十分であり、「本体と作用が合致」せねばならない、禪にあつては、心の根本の確立にとどまり、客観界の仕組、そこを貫く条理を見抜くことなく、「物を見るだけで眼前の事を知らない」とする延平の忠告に触発されたといいます。悟りへの到達より、元来社会正義の実現を視野に入れて居り、程子の学問に回帰し、後に「大学」を治道の根本とみて生涯をかけてその実現に取り組むことになったようです。

同安県主簿の際には、県庁内の帳簿の処理に当たり、県の学校行政も任せられ、教官の充実や書籍の所蔵管理を行いました。しかし、28歳の時、同安県主簿を離れ帰郷し、道教寺院(潭州「たんしゅう」南嶽廟)の管理者に就任し、以降、読書と著述と教育生活に入りました。

39歳の時、建寧(けんねい)府崇安(そうあん)県に飢饉があり、盗賊も横行して政情が不安定となっており、朱熹はこの対策に当たり、県の常平倉の粟600石緊急放出して難民に配給し窮状を救って居ります。しかし、冬にはその回収を図り備蓄し、以降、1石につき2斗(20%)の利息で貸し出す制度(後の社倉)を導入し、地方官吏と士人で共同管理致しました。「一郷四、五十里の間、凶年に遇(あ)うといえども人欠食せず」という成果をあげました。

49歳、南康軍(軍は行政区域、江西)の知事代理に就任しました。南康軍は土地がやせ、戸数は少なく、税金は過酷で、教育レベルも低かったようです。朱熹は民情を聴取し、施設を整備し、教育の振興に精力を注ぎました。とりわけ白鹿洞(はくろうどう)書院の復興に力を注ぎ、儒教興隆を兼ねて学生に向けた学規を定め、「白鹿洞書院揭示」とし、学問の目標を「修己治人」と明記しており、社会活動に取り組むことの重要性を示しております。

51歳、天子(孝宗帝)の詔に応じて朱熹は上奏文(庚子応詔封事)を奉り、「天下国家の大務は、民を恤(あわれ)むより大事はなく、民を恤む実質は、税金を軽くするにあり、税金を軽くする実質は、軍隊を取り締まるにある」とし、南康軍の実例をあげ、中央官界の腐敗を批判し天子自ら正しい綱紀を立てるべきと訴えました。しかし、天子は激怒、翌年、南康軍を去り帰郷しています。

浙東で飢饉が発生し、朱熹は改めて「提挙(ていきょ;監督)両浙東路(りょうせつとうろ)常平(じょうへ



い；市場管理、物価安定）茶塩（さえん；茶塩管理）公事（こうじ；官職）」に任命され、「難民救済の費用を公正に使用し、米粟を提出したものへの報償を十分に行い、有能な人材を登用し、私腹を肥やすものは遠慮なく摘発する」ことを方針とし、社倉法を実施しました。総じて成功をしたものの、これを実施に移すことは、摘発を受けた官僚群の怨嗟を浴びることとなり、後の朱子学排斥の導火線ともなっていました。

59歳の春、天子より時務についての意見聴取の内意があり、辞したものの「戊申封事（ぼしんふうじ）」を上奏し所感をしたためました。今日の時務を、①皇太子を輔翼（輔佐）すること。②大臣を選任すること、③綱紀を振作すること、④風俗を変化すること、⑤民力を愛養すること、⑥軍政を修明（賢明かつ公正）すること、とし軍団首脳部と政府高官との癒着を正すことを具申しました。

同11月漳州（しょうしゅう）知事（福建省）に任命され赴任し、翌年に四書（論語集註・大学章句・中庸章句・孟子集註）を刊行しました。64歳十二月潭州（たんしゅう）荊湖南路（けいこなんろ）安撫使（あんぶし）に任命され翌年5月赴任するも孝宗が崩御され、風向きが変わりました。光宗が病弱で寧宗が即位、時務を奏上したのですが、その時局批判は韓侂胄（かんたくちゅう）等の反目を呼び、朱熹は中央から排斥されてしまいました。

66歳、宰相趙汝愚（ちょうじょぐ）が韓侂胄により追われますと、朱熹には風当たりが厳しくなり、科举試験において朱子学に基づくものは退けられました。朱子学の高弟が流刑となり、朱子学を学ぶことを忌避する者が続出したのです。失意の朱熹は屈原の気持ちが痛いほど分かったのでしょう「楚辞集註」を著しております。持病の脚気も悪化し、71歳で生涯を終えました。

## 四書について

朱熹は、「人々が先ず『大学』を読んでその規模を定め、次に『論語』を読んでその根本を立て、次に『孟子』を読んでその発展するのを見、次に『中庸』を読んで古人の微妙なところを求めなければならぬと思っている」としています。

嘗ては五経（『易経』『書経』『詩経』『礼記』『春秋』）に習熟することが求められ、経書を解釈するには、文意を敷衍（ふえん；詳しく説明）するに注釈を作ることになり、注釈自体も精緻で難解となり、本文と注を交互に読むうちに、老師ですら、経の本旨を離れ、致遠恐泥（行き過ぎて泥沼に嵌る）という事態ともなりがちでした。まして初学の者が何の準備もなくしてこれを読んでも、大旨も要点も理解できず、敬遠されることになりましたが、そればかりではなかったようです。

不立文字、悟りを最高だとする者は、四書五経が役に立つどころか、悟りの妨げとなるとしたのです。人を啓発するどころか人を誤らせ、現実に役にも立たない、孔子は堯舜より賢者でなく、達磨や司馬遷や班固の方が孔子より賢者であるとも批判をしたようです。

「論語」や「孟子」においても、「その言葉はわかっても、意味がつかめず、高遠に馳せる者は支離滅裂で、その言葉までも見失う」という状態を朱熹は憂いたようです。「言葉を分からせるだけでなく、その本意を分からせ、そこに進む方法まで体得せしめた」、それが二程子の学問としたのです。朱熹は二程子を「百代にわたる儒教の伝統が絶えた後に、奮起してひとりあの千年もの間とだえていた伝統をついだ」と評価をしています。

朱熹は学生に対し、学問について、「科举及第・爵位秩禄を目当てとするのではなく、物に格（いた）り知を致（きわ）め意を誠にし、心を正し、身を修（おさ）め、これを推しひろげて家を斉（ととの）え国を治め、以て天下を安んじ得るに至ってこそ、はじめて本当の学問となる」と説いております。

元来、日常の生活に役立たつように勇をふるって始めたものの、懸命にやっていると、浮いて外れてうまくゆきません。残念なことです。しかし、そのまま続けることも肝要です。

## 余談

道は dào で道、dǎo で導となります。道一字で道と導の意味を兼ねており、大學之道とは、大學へと導く意味ともなります。大いに学び導くとは、古くは、誰も行ったことのない所へ行く、食べたことの無いものを食べるとか、人がそれまでしたことのないようなことに勇を奮い、悪戦苦闘して成し遂げるようなことに始まりがありました。

仁とは、原始的には、人をして他の動物と異なり、人らしくせしめるものという意識がありました。古く人々は、「冬は、洞穴に住み、夏は、木の上に木を集めて巢を作り住んだ。まだ火を用ゐて煮炊きすることを知らず、生のまま草木の實、鳥獣の肉を食（くら）ひ、その血を飲み、その毛を貪り食ふた。まだ、麻（あさ）や絲（きぬ）もなく、羽や皮を衣（き）ていた。後に聖人が現はれて、火の利を脩めた。金属で型をつくり、土を合はせ、霊を降ろす高台、射儀場、宮室、木枠の窓、片開きの戸を作り、禽獣をまるやきにし、牲肉を燔（や）き、ものを烹（に）たり、火であぶり、醴酒や酪製品を作った。麻や絲を紡ぎ、祭祀用の布や帛（しろぎぬ）を織った。そのようにして生を養ひ、死を送ることができるようになり、鬼神、上帝を祭り仕へ、皆そのはじめに従うた（礼運）」といひます。

これを聖人としますが、実は、人面蛇身、神でもあり人でも動物でもある存在とみられていました。庖羲（伏羲）がそうす。火を用い料理することを工夫したので庖羲、仰いで天の文（あや；日月星、風や雲の動き）、伏して地の法（のり；成り立ち）を観察し、万物流転を明らかにする方法を考案したので伏羲とされました。「仰ぎては象を天に觀、俯しては法を地に觀、あまねく鳥獣の文と地の宜とを觀、近くこれを身に取り、遠くこれを物に取り、始めて八卦＜ 乾☰（天） 坤☷（地） 坎☵（水） 離☲（火） 艮☶（山） 震☳（雷） 巽☴（風） 兌☱（沢）＞を画し、神明の徳に通じ、万物の情を類す」とあります。

その連れとなる人面蛇身の女媧（じょか）は、泥から人をつくり、男女を結び付ける高媒（媒酌）役をつとめ、死すべき人が子孫をもうけて生き延びることを可能にしたとみなされました。庖羲と女媧は大洪水から生きのびた二人とする伝承もあり、蛇身でからみあう図に描かれ、人間の祖ともされます。

鳥は神の使者とみなされ、人面鳥身の祖に少昊（しょうこう）があります。神農や黄帝の親とされ、神農は人身牛首、牛は農耕の象徴であり、木で鋤や柄をつくり、土を耕し、天から降ってきた五穀の種を蒔き、収穫を感謝する祭を行った。また、百草を嘗め、毒にあたって苦しみつづ、医薬を見つけだしたとされます。

この頃は天と地とはずっと近く往来ができ、竜や河童、種々の物の怪、獣も人と同じく暮らして居り、人であり獣でもあるもの、半神半獣、天上の神、地上の神が天地に入り乱れており、これらが敵味方に分かれて戦いがおこりますと、争乱は天上天下に波及し、天地がしっちゃかめっちゃかになったようです。それで地上の争乱が天に及ばぬようと、天帝が重と黎に命じて天を上げ、地を下げ、天地の交通を断ち切ったといひます。重（おも）いと黎（くら）いですから、地も地下へと押し下げたのでしょう。

古代の漢人は、世界の始めは混冥、幽明でカオスの宇（空間）宙（時間）とみ、時とともに軽いものが上り、重いものが下がり天地となり、ある者は太始（一）から陰陽が生じ陰陽の相互展開により、生、生育、結実、死、再生のサイクルが生まれ、万物が流転し、天上では北辰（北極星）を中心に天の秩序が生まれ、四時（四季）の働きにより、地に万物が生じ、天帝の子が地上にその秩序を下ろし、地を統治するといった世界観を懐くようになったようです。

## 禮



甲骨文



金文



篆文



齊(齊);甲骨文

さて、禮(礼) も、古の用法は21世紀の令和の人には予想外のものです。後漢の説文では「履なり。神に事(つか)へ福を致す所以なり」とあり履lǚは「はきもの」で舞楽の舞人の履(くつ)とされますが、「ふむ」、帝が位に即く(即位)からくるとみられ、福、禄、禮に通じるとあります。令和の人には屁理屈にしかみえないことでしょう。

甲骨文や金文では示辺がなく豊のみです。それは器に供物を盛ります豊(ほう; fēng)と醴酒(れいしゅ)の豊(れい; lì)とを意味しており、後に、醴酒の豊の意味に限定するものとして禮が用いられたのでしよう。禮の起源は飲食、鬼神、死者を含めた飲食にありました。

禮とは、「これ、飲食に始まる。燔(や)いた牲肉、黍(きび)の釀酒、七体に割いた豚、酒甕に溜めたにぎり酒を供へ、手ですくって飲み、土を運び木組をして設けた壇の土を敲(たた)き固めて歌う。かようなことでも、鬼神に敬(つつ)しんで仕へることになる。人が死ぬに及びては、殯をする板屋の屋根に上り、皋gāo某mǒu復fù、(某のところに死んだ人の名をいれて叫ぶ、皋は高gāoに通じる)、高さところへゆかんとする某よ帰って来い! 然る後に、飯玉し、生肉、包んだ魚、煮た肉を供へた。故に、天を望んで祭祀し、地に葬り匿す。體は地氣、魄は陰氣であり重く降る。知氣は靈魂、魂は陽氣、云は雲、鬼は死者の靈、軽く上に在る。靈魂は下に、靈魂は上に。故に、死者は幽(陰)に向かうべく北首、北枕とする。生者は南(陽)を向いて饗飲、饗食する。皆こうして初まったことに従ふ(礼運)」とあります。鬼神は自然の力であり、有難くも恐ろしくもある存在であり、災いを逃れ福がもたらされることを求めます。死者の魂も同様で、安らかにして子孫を守護することを求めます。そして、神人の共食、死者(祖先)との共食を重視しました。獲物に感謝し捧げ、お下がりを分かち合う。祖先の辛苦の功労に感謝し、お下がりを分かち合う。自分たちを生かしてくれるもの敬(つつ)しみて祭祀することが原点であったようです。

しかし、諸国家が形成され、更に王朝が形成されますと、人間社会をうまく機能させることに焦点が移ります。如何にすれば国や王朝に秩序が形成され、それが遵守されるかを模索したのです。「まぎらわしいことを区別し、かすかな兆しを明らかにし、鬼神を迎え供し、制度を考へ、仁を尽くすべきところと義を尽くすべきところを別つものである。政を治め、君位を安んじる。故に、政が正しくなければ、君位は危く、君位が危くなれば、大臣は反(そむ)き、小臣は竊(ぬす)む」とあります。秩序を作り維持するものは権力者の力となります。「そこで君主は、刑を肅(きび)しくし、(上は不正を取り締まることに汲々とし、民はそれから逃れることに汲々とし、)風俗は疲弊し、(法の盲点をつき、すり抜ける者が現れ、)法を変へて対応すれば、法に常が無くなり、法に常が無くなると、禮に秩序が無くなる。禮に秩序が無くなると、士は仕へることをせず(下克上の風があらはれる)。刑を肅(きび)しくし、風俗が疲弊すれば、民の歸すべきところ、抛り所とすべきものがなくなる。これを疵國(しこく)と謂ふ」となり、力に対する限界に直面致します。「故に、政治は(君主が自らのために行ふものではなく、)身を藏(をさ)めねばならぬものである。つまり、その政治は必ず天に本づき、天に交はり倣(なら)ひ、それにより、天が命を降ろすものでなくてはならない。命が社、地主、土地の神に降りるを、地に倣(なら)ふと謂ふ。(地に関することは、社の命ずるところによりて行ふ。)命が祖廟に降りるを、仁義と謂ふ。(人を人たらしめる仁義は、天より祖先に授けられたものにより行ふ。)山川に降る命、これを興作と謂ふ。(これに倣ふものが土地土地の歌舞音曲の風俗となる。)五祀に降りる命、これを制度と謂ふ。(これに倣ふものが土地土地の制度となる。)このようにして、聖人は身を藏めることを固く護る」と



しています。

漢代になりますと、太陽の如く民をあまねく照らし、飢え、寒さ、罪に苦しむ民あるは己のせいとする公明正大なる「堯」、自分を殺そうとした親にすら尽くす孝の「舜」という聖人の理想を天子の在り方、その禮に込めるようになります。

論語においては、世直しに、「子曰わく、之を道（みちび）くに政を以（も）てし、之を齊（ととの）ふるに刑を以てせば、民は免（まぬか）れむとして恥ること無し。之を道くに徳を以てし、之を齊ふるに礼を以てせば、恥有りて且つ格（いた）る」と諭すも、容れられぬ嘆息すら聞こえてくるものです。

齊（斎）ですが、これは祭祀に奉仕する婦人の髪飾りで、婦人たちの容貌、動作が齊一である（揃っている）ことから「ととのふ」とされ、祖廟における祭祀に起源があります。孟懿子（もういし）が孝を問い、孔子が違（たがうこと）無（な）かれと対（こた）へた時、46才年下の御者の樊遲（はんち）がどうということですかと質問し、「生きて之（親）に事（つか）ふるに礼を以てし、死して之を葬（はぶ）るに礼を以てし、之を祭（まつ）るに礼を以てす」と説明しています。礼は宗族における日々の生活において、祖先と子孫、主家と分家、親と子、兄弟姉妹の関係を損なわずよき慣習を培（つちか）うなかで形成されてきたのでしょう。

国家が樹立されれば、礼は他の宗族をも納得せしめるものでなくてはならず、人として共通することが求められます。諸子百家があらわれ、春秋・戦国の世に繰返し検討がなされました。

「左伝」成公十三年（578B.C.[HP](#)）に成肅公が受脤（じゅしん；祖廟で祖神と土地の神に犠牲を捧げ戦勝を祈願しその肉を授かる）の礼を行わず出兵したことを劉子が批判しています。「吾はこう聞いている。民は天地の中（両方の気）を受けて生まれ、命（いのち）を得ている。動作・禮義・威儀が天地のあり方に即して命が定まる（適えば長寿）。理解する者は命を養い福とするが、理解しない者は敗れ禍となる。従って君子が勤（つつ）しんで礼をなせば、小人が力を尽くす、勤しみて礼をなすに敬を致（きわ）めよ、力を尽すには敦篤たれ（厚く思いやること）。敬すとは養神（雑念なく神意のままに為すこと）であり、篤とは守業（生業に専念すること）である。国の大事は祀（祭祀）と戎（戦）にあり、祀は執膳（しつばん；祭肉を分かちつ）にあり、戎は受脤にある。神の大節であるも、今成子が惰（おろそか）にするは其の命を棄てるがごときもので、きっと反（返る）ことはなかろう」と。ここからは、祖神、天神地祇と一体となり、君子が礼により事に当れば民は懸命に働き、君民が一体となれば国は安泰であり豊になるというような認識がみてとれる。

下剋上の時代には諸侯が天子の礼、臣下が君主の礼を行うなど、己の分を越えて礼を行うかと思えば、礼儀を礼として、あるいは礼そのものを無視して憚ることなき者がはばを利かせることともなる。

襄公十三年（560B.C.[HP](#)）に、「君子曰く、讓は礼の主なり…世の治まるとは、君子は能ある者を尚（たつ）び其の下に譲り、小人が農力（農に「あつくともする」つとめ）其上（君子）に事（つか）えることであり、是を上下に礼が有り、そして讒慝（ざんとく；邪惡奸佞の人）を黜遠（ちゅつえん；遠ざける）ので争うことがない。これを懿德（いとく；立派な徳）と謂う。それ亂に及ぶとは、君子が其の功を自称し小人に加え（押しつけ）、小人が其の技（わざ）を伐（ほこ）り君子を馮（しの）ぐなら、是を上下に礼無く、乱と虐が並び生ず。善を争うからである。これを昏德（こんとく；徳に暗い）と謂う。国家の敵（おとろえ）は、恆（つね）に必ずこれによる」としている。

昭公五年（537B.C.[HP](#)）に、晋公が魯への入国の労（ねぎら）い、出国の賄（まいない）の贈与に対する魯公の対応について、礼を失することが無かった。晋侯が女叔齊に魯公はなんと礼に善（よ）いことかと謂うと、女叔齊は、どうして魯公が礼を知っていようと対（こた）えたとある。女叔齊は魯公の礼は礼儀であって礼ではない。「礼は其の国を守り、其の政令を行い、其の民を失わぬもの。今政令は（魯公ではなく）家（大夫の

三家)に在り(自ら)執行出来ておらず、子家羈(しかき)が居りながら用いることが出来ず、大国(晋)との盟約を奸(おか)して小国を陵虐(りょうぎゃく; 侮蔑)し、人の難(他国の混乱)を利用し、其の私(自己の足許の状況)を知らず、公室(の軍)は四分され、民は他(三家)に食され(養われ)ているも、(誰も)魯公を思うことなく、その終(結末)を図らず、国君として難がその身に及ぼんとするに、それを恤(うれ)いもしない。礼の本末はここに在るに、屑屑(せつせつ; こせこせ)と礼儀を以て亟(急務)としている。礼に善しと言われたがなんと遠いことか」と述べている。

祝(官)や史(官)が鬼神に君主の信(まこと、ありのまま)を奏上できないこと、それが礼にもとるともされた。昭公二十年(522B.C. [HP](#))には、齊の景公の疥(かい; 皮膚病)が疔(おこり; マラリア)となり鬼神を敬しないのが原因とされ、祝(官)や史(官)を殺して弁明せよと忠告されたとき、晏子がこう述べた。「有徳の君の若(ごと)きは、外内に廢されることなく、上下に怨み無く、動(はたら)きて事を違(たが)えることも無い。其の祝や史が薦信(せんしん; 犠牲を捧げまことを奏)すも、心に愧(はじ)ること無くば、鬼神は(犠牲を)用(受け)饗(共食し)、国は其の福を受ける。祝と史が其れ蕃祉(多福)老壽(長寿)を與(とも)にすは、信(まこと)の君の使(つかい)となり、其れ鬼神に忠信(偽りなくまこと)を言うからである。其れ適(たまに)淫君に遇(あ)うが、外内が頗(すこぶ)る邪(よこしま)にして、上下は怨疾(えんしつ; 恨み憎)にし、動きて辟違(へきい)を作(な)し(則「のり; 礼」を違え)、欲に従い私(ひそか)を厭(いと)い(おおっぴらに)、高臺や深池(を作り)、撞鍾(打楽器の音楽)や舞女(を楽しみ)、民の力を斬刈(ざんがい; 刈り尽くし)、其の聚(蓄)を輸掠(掠め取り)、以て其の違(反)を成し、後人(の誹り)を恤えず、暴虐淫從し、肆行(したい放題)非度(限度なく)、還忌(かんき; 憚る)所無く、(他者からの)謗讟(ぼうとく)を不思(気にせず)、鬼神を憚(はばか)らず、神の怒り民の痛みに心を悛(つつしみ改め)ることが無い。其れ祝や史が薦信せば、これは(君の)罪を言うことになる。其れ失(あやまれる)を蓋(おお)い美と數(かぞ)えば、これは矯誣(きょうふ; ありもしない事を事実とする)なり。進退無辭(どうしようもなく辞めるもならず為せば)、それは虚(うそ)にして媚(こび)を求むものであり、これでは鬼神は饗せず其の国に禍となり、祝も史も與に夭昏(ようこん; 若死)孤疾(孤独・疾病)となる訳は、暴君の使となり、其の言が鬼神を僭慢(せんまん; 詐欺侮蔑)となるからです」と。

孔子も、「能(よ)く礼讓(れいじょう)を以て国を為(おさ)めん乎(か)、何か有らん。能(よ)く礼讓(れいじょう)を以て国を為(おさ)めずんば、礼を如何(いかに)」と述べています。当時の諸侯の政治が礼に反していることを憂いて発した詞ですが、聞く耳を持つ諸侯はなく、失意の中に亡くなります。

左伝の世界においては、礼は国の浮沈にかかわる君主と家臣のあり方を視通す判断基準であり、個々の君主や大夫の進退、興亡の実例の中から善きもの、悪しきものが抽出されて結実され、生死のかかる緊張感がありました。

漢帝国となり、儒学が国学となり、博士により太子への帝王学の講義、諸侯の子弟や士大夫の子弟、大学で講義されるようになってからの礼は、整備された体系のなかで修得さるべき規範となります。小学では礼儀・作法として修得することが求められ、ついには礼と礼儀の差もわからなくなり、礼が臣従の礼儀のなかに埋もれ、君主の「礼」あってこそその臣の「忠」でありますが、「礼」抜きの「忠」、愛国の跋扈となり、礼を以て天子や君主に直言せば左遷や死を招くものとなりました。

了 2023. 09. 21